

## 論文

# 日本占領下華北におけるスポーツイベント

菊地 俊介

## はじめに

日中戦争期における日本の対中国占領統治を支える論理は、日本との親善、提携が中国にとって正しい道であると説くものであった。だが、その親善や提携は対等な関係ではなく、日本占領下中国では、近代国家としての成熟度や文化面で日本の優位が主張され、中国は日本の指導によって国家を再建すべきだという言説が繰り返された。特に近代以来「東亜病夫」と呼ばれる屈辱を経験してきた中国に対して、日本では体育が普及、発展し、日本人が健全な身体や精神を養い、国家を支える国民として育成されていることは、中国が日本に学ぶべき要素のひとつとして日本占領下でもたびたび論じられた。

本稿では、日本占領下華北に焦点を当て、そこで盛んに実施されたスポーツイベント、特に同地の中国人が日本人と共に参加、或いは対戦した国際試合について考察する。こうしたスポーツイベントは、日本における体育の発展を中国に対して見える形で示し、日本の優位を中国に確認させる目的を持っていたと考えられる。だが、国際試合がナショナリズムを高揚させる危険性を孕む政治空間であることは、スポーツ社会学の領域でもしばしば指摘されることである（石坂・小澤、2015, p. 7, 土佐、2015, p. 1）。スポーツイベントが被支配者たる中国人のナショナリズムを煽り、支配を搖るがしかねないという懸念は、日本の対中国占領統治でも直面し得る問題であったと想像できよう。

こうした視点で他民族支配とスポーツイベントの関係を考察する研究は、対朝鮮植民地統治に関する研究の方が進んでおり、参考になる。小野（2014, 2015, 2017）によれば、朝鮮総督府は日本人と朝鮮人の教育を差別化し、朝鮮人の体育の発展を抑制する政策をとり、特にスポーツは敵愾心を煽るために不都合だと考えてこれを統制し、日本と朝鮮の対抗試合を中止させたこともあった。武断政治期から文化政治期への転換を経て、朝鮮総督府は体育・スポーツ容認に転じ、逆にスポーツは「内鮮融和」を促進するものとして積極的に利用されるようになるのだが、ここで朝鮮人は日本人との対抗試合を通して民族意識を高めようとしたという。スポーツイベントは、「内鮮融和」を表向き提唱しつつも民族意識が衝突する場となつたのであった。金（2014, 2017）は、国際試合での朝鮮人の活躍が民族意識や自信を高める作用を及ぼし、日本人の警戒心を引き起こしたことを見ている。だがその反面、朝鮮人は制度上日本人として出場するため、結局対外的には「内鮮融和」をアピールしてしまうという矛盾を孕んだことも指摘する。この点は、中国人の中国として統治された日本占領下中国とは事情を異にするが、ともあれ植民地統治下

でのスポーツは、被支配民族の民族意識を高め、支配民族を脅かし得る力を育ててしまう危険性を持つことに変わりはない。

中国の日本占領地区を考察対象に含めた代表的な近代スポーツ史の先行研究は、高嶋（2012）である。高嶋は、日本占領下中国（1940年3月以降、汪兆銘政権）、満洲国、モンゴル、植民地支配下の朝鮮に台湾と、東アジアを中心に、フィリピンなど東南アジア、更に欧米も視野に入れながら、近代日本が関わった国際スポーツイベントについて考察し、そこに映し出される複雑に絡み合った国際関係やそれを背景とする矛盾などを描き出している。日中戦争期の対中国占領統治と関連して取り上げているのは、日本对中国の試合を含む国際試合として実施された日満華交歓競技会と東亜競技大会である。高嶋はこれらの実施に至った背景や、スポーツイベントをめぐる日本、満洲国、中国の間の相克についても論じ、取り上げている問題は多岐に亘るが、結果的には満洲国や中国に対して「東亜の盟主」たる日本の優越性を示すことが目的で、実際に日本が圧倒的な強さを見せており、スポーツイベントが中国及び満洲国に対して日本の優位を印象づける場として機能したことを論じている（高嶋、2012, pp. 52–57, 76–79, 103–104）。日本人は日本の優位を示すために勝利に執着したが、これに関連して、高嶋は第2回東亜競技大会における満洲国对中国のバスケットボールの試合で、日本人（と思われる）審判の不公平を発端とし、「五族協和」を体現するように中国人、朝鮮人、日本人の選手からなる満洲国チームに対して中国人観衆が石を投げつけた事件に触れる。加えて日本が満洲国や中国に一部敗れた種目があったことから、この事件は対抗試合がナショナリズムを刺激する危険性を日本人に認識させる契機となり、以後のスポーツイベントの種目を試合ではなく集団体操に切り替える提言もなされたともいう（高嶋、2012, pp. 107–108）。

それでも、中国のナショナリズムを煽って日本の支配が脅かされることを危惧してスポーツイベント自体を避けた様子は見られない。高嶋は、華北のいわゆる傀儡政権の付属団体として現地民衆の教化動員工作を担った中華民国新民会（以下、新民会）や日本軍からも、日華親善、防共などの政治宣伝の意味も含めて、スポーツイベントは占領統治を進める上で有効なものと見なされていたと論じており（高嶋、2012, pp. 53–54），むしろ占領統治者側が積極的に推進していたように見える。高嶋は日本占領下の天津市で体育顧問として中国人選手の指導に当たった岡部平太を取り上げ、中国人の実力を高めることで中国、日本、満洲国の提携を可能にし、東亜の復興を目指そうとした彼の姿勢について論じているが（高嶋、2010, 1, p. 119, 2010, 3, p. 67），これも中国のナショナリズム高揚を日本人が警戒するのとは逆の方向性を示す事例と言えよう。

このほか、日本のスポーツ史を競技ごとに分けて概説した財団法人日本体育協会編（1970, 1986）や日本体育学会体育史専門分科会編（1967）は、日満華交歓競技会や東亜競技大会を取り上げ、日本が大勝したことに触れるにとどまる（財団法人日本体育協会編, 1970, pp. 238, 334, 346–347, 473, 1986, pp. 80, 630, 667, 日本体育学会体育史専門分科会編, 1967, pp. 217, 227, 277）。小澤（2009）と後藤（2013）は、日満華交歓競技会にも若干触れながら東亜競技大会についてその開催に至る背景を中心に考察したもので、

この大会を日本が「東亜の盟主」としての威儀を確立しようとするスポーツイベントであったと論じる。日本では希少な中国体育史の概説書である笹島（1966）も、上記2大会を取り上げて中国の成績が振るわなかつたと述べ、加えて日本占領下華北では華北体育大会、華北都市交歓体育大会をはじめ、各地でスポーツイベントが行われた事実を述べるのみで、これらの内容については考察していない（笹島、1966, pp. 87-89）。

一方、中国における先行研究に目を転じると、その問題意識はおよそ共通している。取り上げる具体例にはそれぞれの先行研究によって差があるが、前述の代表的な大会に加え、日本の戦争を支持する政治スローガンを掲げた様々なスポーツイベントを挙げて概説されている。そして日本占領地区における体育は日本人の統制を受け、スポーツイベントの本質は「日華親善」を演出する「奴化」教育の場として機能したもので、国際試合に日本占領下の中国人を参加させることは傀儡政権の合法化を図るものであったことなどを否定的に論じるにとどまっている（顏紹瀘・周西寛、1990, pp. 418-419, 譚華、2005, pp. 295-296, 体育院系教材編審委員会『中国近代体育史』編写組編著、1985, pp. 149-150, 羅時銘・趙謙華主編、2008, pp. 302-309, 汪智・梁峻、2000, pp. 124-127, 夏書宇・巫蘭英・劉薇、2007, pp. 241-242, 谷世權、1989, pp. 235-236）<sup>1)</sup>。なお、中国の先行研究として挙げられるものは上記のような概説書ばかりである。近年発表された肖斌・王海燕・高潔（2016）などの論文もこれら概説書の内容をまとめ直したものに過ぎず、中国で当該分野の新たな研究が進んでいるとは言えない。

本稿で明らかにするように、日本占領下華北で行われたスポーツイベント、或いは同地の中国人が参加した国際試合は上記の数例にとどまらないばかりか、日本占領下華北は様々な組織によって、スポーツイベントが盛んに実施された社会であった。その中には日本人との共同参加や対抗試合だけではなく、中国人のみを対象としたスポーツイベントも少なくない。それらを含めて全体像を復元することで、日本占領下華北においてスポーツイベントが持った意味を考察することが可能になろう。そのためには中国側の資料を重点的に用いる必要があるが、中国史研究以外の領域で進められた先行研究にはその点で自ずと限界がある。日中双方の資料を用いている高嶋（2012）も考察の主軸は日本側にあり<sup>2)</sup>、

1) このほか、満洲国成立初期の頃に日本人と中国人の学生が共に参加した運動会を取り上げた先行研究は、次のように記述している。普段から中国人を見下す日本人の態度を憎悪していた中国人が、優秀な中国人選手を選出してリレーチームを作り、日本人チームに戦いを挑んで中国人チームが勝った。すると場内の中国人観衆は涙ぐんで歓声を挙げ、雪辱の喜びを分かち合ったという。そして「同じようなことは東北や華北、東南の各地でもしばしば見られた」というのである（国家体育委体育文史工作委員会・中国体育史学会、1989, p. 361）。それならば華北でもスポーツイベントが日本への対抗心を高揚させる状況が見られたということになるが、当該部分の典拠は記載されていない。

2) 高嶋（2012）は長文の引用資料以外の注釈を省いている。この点、高嶋（2010, 1, 2010, 3）が日満華交歓競技会をめぐる問題を中心に取り上げているので、併せて参照すると典拠が分かる部分もある。

笹島（1966）及び中国における一連の先行研究も概説にとどまっている。本稿では中国側の資料を通してこれらスポーツイベントの全体像を俯瞰しつつ、特に試合結果や試合に伴う言説を分析し、上記の認識について再検討を行う。

また、前述の通りスポーツイベントはナショナリズムと密接に関わるもので、日本の占領統治を脅かす要因にもなり得る。加えて、国民の体力や精神を鍛える体育は近代国家建設の要でもある。即ち体育をめぐる諸工作は对中国占領統治のあり方の根幹に関わり、いわゆる傀儡政権の性格を問い合わせる考察にもつながる問題であろう。その意味で、本稿は新民会の民衆教化動員工作に見る日本占領下華北の近代国家建設につながる動きを捉えつつ傀儡政権史像を問い合わせ直そうとした菊地（2013, 2015）などの問題意識とも連続性を持つ。

## I. スポーツイベントの実施状況と体育・スポーツの発展

本稿では、中国側の資料として新聞『新民報』<sup>3)</sup> 及びその後継紙『華北新報』を主に用い、両紙で情報が不足する分については他の資料をもって補うこととする。『新民報』は新民会の機關紙であり、占領統治の方針を示し、政策宣伝をする役割を担ったことから、日本の対華北占領統治の中でスポーツイベントがいかに位置づけられたかを考察する上で有用であると考えられる。加えて、『新民報』は1938年1月から1944年4月まで、『華北新報』は1944年5月から1945年9月まで途切れることなく発行されており、通時的な考察が可能であることも利点である。なお、『新民報』と『華北新報』は日本軍統制下にあった新聞で、いずれも日本人と中国人が共に編集に携わっており、日本の占領統治と戦争遂行を一貫して支持する新聞であったという見方が定着している（郭貴儒・陶琴、2003、陳昌鳳・劉揚、2004、2005、程曼麗、2004、程曼麗・劉波、2005、劉揚・陳靜文、2013）。だが後述するように、体育・スポーツイベントをめぐる言説には、日本に対抗するナショナリズムを露骨に打ち出すことはなくとも、必ずしも日本を引き立てるばかりではなく、中国の体育の発展や中国の選手を応援する側に立った報道姿勢も見て取れる<sup>4)</sup>。

『新民報』は、新民報社総務部長が「本紙は新中国復興の使命を負うゆえに、創刊以来、体育を提唱しない日はなかった」（「社稷壇畔氣象万千 本報主辦中日体育座談会昨日盛大挙行」『新民報』（北京）1939, 8, 3, p. 3）と自認するように、特に体育を重視した新聞

3) 本稿では『新民報』の中でも北京版を用いる。そのため、華北全体を視野に入れつつも、北京に関する内容に情報量がやや偏ることをお断りしておきたい。また、本稿では体育組織やスポーツイベントの名称についても、日本語資料から確認できるもの以外は基本的に『新民報』及び『華北新報』紙上の中国語表記をそのまま用いることにする。それらについては、当時日本語で他の呼称があった可能性もあることに留意されたい。

4) 近年、汪兆銘政権下の新聞が単に親日宣伝ばかりしていたわけではないという、日本占領下のメディアに対する従来の認識を覆す研究もなされているが（堀井、2017）、『新民報』及び『華北新報』についてはそうした先行研究はない。その意味では本稿を通して、日本占領下華北のメディアのあり方を問い合わせ直すことにもなる。

でもあり、発行元の新民報社自体もサッカー大会やバレー・ボール大会を主催していた（「本報主催春節足球比賽」『新民報』（北京）1938, 1, 18, p. 6, 「本報主辦之足球賽 駐京英法義士兵均擬參加競技」『新民報』（北京）1938, 2, 3, p. 5, 「本報主辦京津埠際足球賽 今日下午揭幕」『新民報』（北京）1938, 5, 1, p. 7, 「本報社主辦夏令公開排球賽 七月九日開始比賽」『新民報』（北京）1938, 6, 26, p. 7）<sup>5)</sup>。

日本占領下華北における体育・スポーツ振興の旗振り役としてまず挙げるべきは、新民会である。1938年7月に新民会首都指導部体育会が設置され（「首都指導部所属体育会發会式 今日下午在青年會舉行」『新民報』（北京）1938, 7, 6, p. 7），1939年6月に新民会中央指導部内に華北新民体育協会を設置（「華北體協會強化內部陣容 令各地推薦各項職員」『新民報』（北京）1939, 6, 2, p. 3），その後、同協会は1940年11月に改組して華北体育協会となり（「華北體協會 今舉行發會式 下午二時在勤政殿」『新民報』（北京）1940, 11, 5, p. 2），形式的には新民会から独立した組織になった。そのように改組した理由は、興亜院華北連絡部の調査報告によると、教育行政との連携強化を図るためというが<sup>6)</sup>、一方で「華北体育協会は華北政務委員會<sup>7)</sup> 教育総署監督の下に中華民国新民会之を指導することになっている」ともあり（興亜院華北連絡部, 1941, pp. 136-137），結局のところ新民会の指導下にある組織という実質に変わりがないように見える。この華北新民体育協会及び華北体育協会は、本稿で取り上げる様々なスポーツイベントの企画や運営、参加選手の選抜や指導などの責任を負った組織である。

だが、スポーツイベントの実施主体は多様に存在し、それらの団体も中国人のみを対象とした試合から、日本人と中国人の共同参加の試合、或いは両者の対抗試合まで、様々実施していた。まず、北京市公署教育局などの行政機関もスポーツイベントの主催者であった。建設東亜新秩序運動大会など、時局に対応させて実施した運動会や（「建設新秩序運動会昨已圓滿藏事」『新民報』（北京）1939, 3, 8, p. 3），定期的に北京市内の小中学生を集めて実施した運動会は中国人のみが参加するものであったが（「全市春運会定期舉行 競賽項目偏重團體表演」『新民報』（北京）1943, 5, 25, p. 4, 「鍛鍊學生堅強體格 中小学秋季運動会」『華北新報』1944, 10, 6, p. 4, 「全市春運会昨舉行 參加男女學生數千盛況空前充分表現戰時青年蓬勃生氣」『華北新報』1944, 6, 4, p. 4, 「北京市中小学秋季運動会 今晨在先農壇開幕」『華北新報』1944, 10, 14, p. 2），盧溝橋事件が起きた7月7

5) 『華北新報』発行元である華北新報社もバスケットボール大会を主催（「本報主辦籃球比賽會 今在芸分中学舉行」『華北新報』1945, 5, 5, p. 2），また華北新報の天津分社は、日本人と中国人が共に参加する中日体育錬成大会を主催していたことが確認できる（「本報天津分社主辦體育錬成會今揭幕」『華北新報』1945, 5, 13, p. 2）。

6) 高嶋（2012）は華北体育協会への改組の背景を、汪兆銘政権が南京にあった新中国体育協会に華北新民体育協会を吸収合併させようとしたことに華北を統制する日本人が反発し、華北で独立した地位を保つためだったと説明する（高嶋, 2012, p. 70）。

7) 華北政務委員會は、華北を統治したいわゆる傀儡政権である中華民国臨時政府が、1940年3月に汪兆銘政権に吸収合併された後、中華民国臨時政府を継承した統治機構である。

日を記念する興亜記念日を期に実施した体育大会や第5次治安強化運動<sup>8)</sup>の一環として実施した体育大会には、日中双方の学生が参加した（「興亜体育紀年大会 七日在先農壇体育场举行中日学生参加者達万余人」『新民報』（北京）1942, 7, 4, p. 4, 「日華交歓体育大会 今晨在先農壇盛大举行」『新民報』（北京）1942, 10, 31, p. 4）。

また、先行研究では取り上げられていないことだが、華北には種目ごとの日本人体育団体も多く存在し、それらが主催者となって実施したスポーツイベントも少なくなかった。『新民報』及び『華北新報』からは、北京日本排球協会<sup>9)</sup>、北京日本庭球協会<sup>10)</sup>、北京日人卓球聯盟<sup>11)</sup>、北京日本水上聯盟<sup>12)</sup>、華北日本陸上競技聯盟<sup>13)</sup>、北京日本陸上協会<sup>14)</sup>、北京日本居

8) 治安強化運動とは、華北政務委員会が発動し、日本軍が実施した中国共産党に対する掃討作戦と、それに伴う占領地での反共宣伝工作である。

9) 同会は成立以来、毎年春と秋に日中双方の市民が参加するバレーボール大会を実施してきたという（「京日本排球協会 開会籌備排球大会」『新民報』（北京）1943, 5, 12, p. 4）。同会は他にも、日中双方の市民の身体を鍛え、日華親善を深めることを目的に掲げ、日本占領下華北で日本語新聞『東亜新報』を発行していた東亜新報社との共催による日中対抗試合も実施した。（「京中日国民排球大会 定下月七日挙行」『新民報』（北京）1942, 5, 20, p. 4）また、満洲国建国10周年慶祝を掲げて北京満洲国大使館との共催や（「慶祝満洲建国十週年 中日排球賽昨挙行」『新民報』（北京）1942, 9, 14, p. 4），国民政府還都（南京に汪兆銘政権成立）と華北政務委員会成立5周年を祝して北京市体育協会との共催による大会を実施した（「中日排球賽現開始籌備」『華北新報』1945, 3, 20, p. 4）。

10) 同会も日華親善の促進を目的に掲げ、東亜新報社の後援を受けて日本人と中国人の双方が参加する日華交歓網球大会を実施した（「日華交歓網球大会 明日在稷園盛大揭幕」『新民報』（北京）1942, 6, 13, p. 4）。

11) 同聯盟は北京の日本人、北京の中国人、天津の中国人の3単位が参加する大会を天津体育協会、新民報社と共に催した（「本報共同主辦京津中國人士埠際桌隊比賽十月八日在京挙行」『新民報』（北京）1938, 9, 23, p. 3, 「本社共同主辦京津乒乓球隊 今晨開始比賽」『新民報』（北京）1938, 10, 8, p. 3）。

12) 同聯盟は新民会北京特別市総会主催の北京市全体規模で日中双方の市民が参加するスケート大会に、華北体育協会北京市分会と共に贊助団体として名を連ねている（「第四届市民滑冰大会 今在中南海挙行」『新民報』（北京）1944, 1, 28, p. 4）。

13) 同聯盟は華北陸上競技大会を華北新民体育協会と共に催した（「華北競技大会 九月三十日起挙行」『新民報』（北京）1939, 8, 27, p. 2）。高嶋（2012）が「北支日本陸上競技連盟」と表記している団体と同一と思われる。高嶋は、1940年に東京で開催された第11回明治神宮国民体育大会に参加する華北在住の日本人選手の予選会を華北新民体育協会と共に催した団体として同連盟に触れているが、それ以上の説明はない（高嶋、2012, p. 197）。

14) 同会も国民政府還都二周年記念と銘打ち、日本人と中国人が参加するマラソン大会を実施した（「中日健児三百余人参加 馬拉松比賽大会」『新民報』（北京）1942, 3, 30, p. 3）。

留民陸上戦技班<sup>15)</sup>，更に特定の競技の団体ではないが，北京日本体育協会<sup>16)</sup>といった団体が確認できる。それぞれが実施したスポーツイベントについては注釈に譲るが，日本人側の団体が主体となり，日本人と中国人が共に参加する，或いは対抗する試合も多く実施していた。こうして見ると，日本人と中国人がスポーツイベントという場で衝突することでナショナリズムを煽りかねないといった警戒心は薄かったようである。

ナショナリズムの高揚という問題のほか，体育・スポーツには近代国家建設の要という側面もある。これについて考察すべく，日本占領下華北における体育・スポーツに関する論説やスポーツイベントにおける要人のスピーチなどを見てみよう。前述の通り，新民会は組織内部に体育・スポーツに関わる専門機関を設け，その旗振り役を担った。1938年6月に，新民会首都指導部体育会設立の動きが始まったが，その趣旨に掲げたのは，「一般市民の体位の向上，健全な運動，競技の普及，新民精神を発展振興しその資質を向上させること」であり，将来的には組織を北京から他省の都市にも拡大して「国民の体位向上，同時に一般民衆が新民精神を体得しこれを高め，健全な国民を養成することを期待する」というものであった。活動内容には，各種競技大会の実施やその選手の決定と派遣，研究，講習会，映画会などの実施が挙げられている（「新民会首都指導部將設立体育会 詳細規程已擬定」『新民報』（北京）1938, 6, 8, p. 3）。

同会の発会式で，新民会中央指導部長，即ち新民会全体の統括する立場にあった繆斌は，日本の体育・スポーツは精神の修養を含むものだと述べ，「日本に学べ」という視点を打ち出しつつ，中国の過去の体育・スポーツは競技のための選手を育成するものであったが，今後はそれにとどまっていてはならず，民衆の健全な心身の育成を目的とすべきだと説く。更にそれは東亜の和平や復興に対する責任を担うためだとも付け加える（「首都体育会昨発会式 全体理事舉行宣誓由余会長發委任状」『新民報』（北京）1938, 7, 7, p. 7）。繆斌はラジオ講演でも，日本の国民は体育に努力しているが，中国が「東亜病夫」と呼ばれてきたのは体育を軽視してきたからだと述べる。そして，偉大な事業は健全な身体と精神をもって実現するものであり，体育・スポーツは一部の運動選手養成だけを目的とせず，一般民衆に普及することが大切だとここでも繰り返す（「興亜与体育 繆部長昨播講」『新民報』（北京）1939, 10, 30, p. 3）。同様の批判や提言は，新民会の教育工作の責任者である教化部長の宋介のラジオ講演にも見られるほか（「興亜体育週間的感想 教化部長宋介播講」『新民報』（北京）1939, 11, 4, p. 3, 「興亜体育週間的感想 教化部長宋介播講（続）」『新民報』（北京）1939, 11, 5, p. 3），『新民報』では繰り返し現れる（「新民会首都指導

15) 同班も国民政府還都周年記念の中日市民競走大会や，日中両国民の戦意を高めることを目的とした春季体育大会を実施した（「団体競走 電電奪得冠軍」『新民報』（北京）1943, 3, 15, p. 4, 「昂揚中日国民戦意 春季体育会今挙行」『華北新報』1945, 5, 20, p. 2）。

16) 同会は日中双方の民衆が自由に参加できるスケート大会やマラソン大会を実施した（「京市溜氷大会全部籌備就緒 十三四両日在中南会挙行」『新民報』（北京）1940, 1, 7, p. 3, 「華北体協將挙行馬拉松競技会 中日民衆均可自由参加」『新民報』（北京）1940, 1, 10, p. 3）。

部体育会 昨開理事大会』『新民報』(北京) 1938, 6, 15, p. 3, 「夏季体育訓練講習会規程課目擬定 七月十一日起举行兩週」『新民報』(北京) 1938, 6, 25, p. 3, 「華北聯合体育会開幕」『新民報』(北京) 1939, 3, 8, p. 1)<sup>17)</sup>。

日本占領下華北では、確かに日本の戦争支持を呼びかける政治宣伝を目的としたスポーツイベントが多かったのも事実で、満洲国建国や汪兆銘政権成立の周年記念<sup>18)</sup>、漢口や広州の陥落記念、シンガポール陥落記念など、日本の戦局に対応させて北京市全体を巻き込んだ運動会が開催されている(「慶祝克復廣漢全市運動大会明日正式開幕」『新民報』(北京) 1938, 10, 29, p. 3, 「慶祝新嘉坡陥落 全北京市体育大会」『新民報』(北京) 1942, 2, 12, p. 3)。だが、上記の政治宣伝色を打ち出すスポーツイベントの中にも、同時に市民の体育向上を目的に掲げているものがある(「慶祝還都政会成立 体協拳辦運動大会」『新民報』(北京) 1943, 3, 19, p. 4)。

1939年6月、華北新民体育協会首都支部主催のテニス大会は、「国民の体育向上」、「市民の身体健」、「新民精神の振興」を図ることを目的とし、参加資格は「本市(引用者注:北京市)の中華国民は皆参加可能」としている(「体協会将拳辦網球比大会 大会規則已均擬定」『新民報』(北京) 1939, 6, 3, p. 3)。1940年1月に行われた同じく華北新民体育協会首都支部主催の水上運動会も参加者は中国人が中心であったが、市民の体育向上と新民精神の徹底理解を目的に掲げている(「冰場即將閉幕 再作一次表演」『新民報』(北京) 1940, 2, 4, p. 2)。更に新民会は「新中国勃興の象徴として」、「東亜新秩序に貢献するため」などと謳いつつではあるが、各学校や地域単位でも運動会を実施するよう呼びかけた(「新民会竭力樹立国民体育新基 令各地拳辦秋季運動」『新民報』(北京) 1938, 10, 6, p. 3, 「新民会体協会提倡開運動会 函各校願為後援並贈獎品」『新民報』(北京) 1939, 5, 18, p. 3)。これらも一般市民への体育・スポーツ普及を試みた実践例と言えよう。

いわゆる傀儡政権の近代国家建設に向けた政策を考察する上でも、中国人一般市民への体育普及や中国人の体力向上を目的に掲げ、市民に参加を呼びかけるスポーツイベントが多く実施されたことには注目すべきであろう。だが、戦時動員できる人材を育成する観点に立てば、中国の体育・スポーツの発展には日本の要請に応える側面もあったはずである。

日中戦争末期に近づくと、戦時体制と体育・スポーツを関連づけた表現が散見するようになる。中国語雑誌『華北体育』を発行していた華北体育月報社が主催した龍舟競漕大会でも、「国民決戦意識を高める」ことが目的に掲げられている(「体育月報社主辦龍舟競賽会 端午節在北海挙行」『華北新報』1944, 6, 7, p. 4)。華北体育協会常務理事や華北政

17) 中国の過去の体育・スポーツのあり方をめぐる当時の評価には若干議論の余地があり、中には日中戦争以前の中国の体育・スポーツを、国際競技大会で中国が勝利したことから栄光の歴史として回顧する言説や(「華北体育之展望 中日滿應互提携 津体協会幹事郭蔭軒昨在津廣播電台講演」『新民報』(北京) 1938, 7, 23, p. 6), 中国は1931年から政府が体育を提唱してきたとして、日中戦争以前からの体育・スポーツの発展を評価する言説もある(「東亜体育界之鳥瞰」『新民報』(北京) 1942, 8, 9, p. 3)。

18) 注9, 14, 15も参照。

務委員会教育総署体育科科長を務めた李洲（「戦時体制下的体育 教育総署体育科科長李洲」『華北新報』1944, 5, 1, p. 2）も、戦時体制下にある現在、スポーツも個人のためではなく国家のためになすべきで、全体主義、集団訓練による国民体力と組織化の強化が必要だと説いた（「戦時体制下的青年応注重集団鍛錬 体育界名流李洲先生現身説法」『新民報』（北京）1943, 7, 21, p. 3）。

同時に、深刻化する食料不足に対応して、増産と体育が結びつけられるようになる。それは華北政務委員会教育総署が発行する『教育時報』にも、「集団勤労増産」が「体育に関する事項」として扱われていることや（「教育総署三十二年度施政概要」『教育時報』15, 1943, 11, p. 24），教育総署が実施した集団勤労増産指導人員講習会に各省、各市の体育股長や学校体育教員が招集され、岡部平太など日本人体育指導者が講師を務めていることにも表れている（「教署主辦集団勤労増産指導人員講習会」『教育時報』11, 1943, 3, p. 35）。増産のための勤労動員を進めるには、体育を通じた国民の身体強化が必要だということであろう。華北体育月報社は「健身健国」という映画を製作し、体育増産電影大会という映画会を開いた（「体育増産電影大会 昨在中央影院盛大举行」『新民報』（北京）1944, 3, 13, p. 2）。また李洲も、体育の目的は国民の身体を鍛えることと、戦時の増産協力、戦力増強にあると述べ、集団訓練を通して動員体制を確立すべきだなどと主張している（「戦時体制下的体育 教育総署体育科科長李洲」『華北新報』1944, 5, 1, p. 2）。

以上のような日中戦争末期の状況は、日本占領下華北の体育・スポーツの発展が結局のところ日本の戦争協力に帰結したかのようにも思わせる。汪兆銘政権の対日協力を引き出そうとする対華新政策に対応したものという見方もできよう<sup>19)</sup>。だが中国における体育・スポーツの発展は、進んだ日本と劣れる中国という構図を確認して占領統治を補強するという要素をひとつ失うことであったのも事実であろう。次節でこの点について考察する。

## II. スポーツイベントの試合をめぐって

序論で述べた通り、先行研究では日本と中国が戦った特定の国際試合に考察対象が集中し、日本が圧倒的勝利により優位性を示したことについて重点が置かれている。本稿ではそれ以外のスポーツイベントも含めて考察し、日本占領下華北における体育の発展に着目してみる。特に試合結果、競技成績と、それをめぐる指導者やメディアが発した言説を分析し、日本占領下華北におけるスポーツイベントの社会的位置づけや作用について考察する。

### 1) 中国バスケットボールチームの訪日試合（1938年10月）

これは新民会が東京に派遣したバスケットボールチームが日本チームと戦ったもので、

19) 1943年初頭より、日本は汪兆銘政権に対して租界返還、治外法権撤廃などをを行い、日本による統制を緩和し、汪兆銘政権の主権を尊重する方針に転換した。太平洋戦争における日本軍の戦局悪化に伴い、汪兆銘政権の戦争協力を必要としたことがその背景にある（柴田、2009, pp. 45-53）。

李洲が団長を務め、日中全面戦争勃発後初めての訪日親善試合であったという（「津市昨日歓迎訪日籃球代表 表演比賽大挙行」『新民報』（北京）1938, 12, 5, p. 3）。「中華」チームが東京海上、簡易保険、日本電気会社、学士俱楽部を相手に戦い「連戦連勝」だったと報じられている（「訪日籃球隊在東京比賽 戰勝兩場」『新民報』（北京）1938, 10, 30, p. 3、「訪日籃球隊連戦連勝」『新民報』（北京）1938, 10, 30, p. 3）<sup>20)</sup>。

ところが中華チームの帰国後、天津市が彼らを招待してパフォーマンスを競わせる大会を開くものの、そこで「委員長」と肩書きを持つ<sup>21)</sup>李泰棻は、選手たちが渡航する前に我が国の発展に生かすべく日本の体育の長所を学んでくるようにと述べたことを振り返り、今回の体験を生かして自らの短所を正すように望むと述べる（「津市昨日歓迎訪日籃球代表 表演比賽大挙行」『新民報』（北京）1938, 12, 5, p. 3）。そして新民会天津市指導部教育会では、同チームの帰国を受けて「友邦」たる日本チームの技術について学ぶことをテーマに座談会を開こうという議論に発展していく（「津体育会舉辦座談会」『新民報』（北京）1938, 12, 7, p. 3）。更に選手たちも、自分たちのチームは試合での秩序が乱れていたと帰国後に自己批判していた（「社論 送中国参加親善交驩運動大会選手派遣団赴満」『新民報』（北京）1939, 8, 22, p. 3）。上記の報道を見る限りでは「連戦連勝」という華々しい結果を残した中国人チームであるはずだが、帰国後は報道にも勝利を称える言葉は見当たらず、それよりも負けたはずの日本チームの長所ばかり語ろうとするところに、体育・スポーツにおいてはそもそも日本が中国より優越するものという固定観念の存在を窺わせる。だが、以下に見るようこののような論調ばかりが続いたわけではない。

## 2) 日満華交歓競技会（1939年9月）

同大会の企画の過程や試合の模様については高嶋（2010, 3, 2012）が詳述している。日本、満洲国、そして満洲国とは区別して日本占領地区の中国が「中華」と呼ばれ、合計3国の代表選手が戦った国際大会である。なお、この中華選手団は華北の中国人選手で構成されていた<sup>22)</sup>。この段階では華中は戦争の影響により、スポーツイベントに参加する余裕などなかったという（高嶋、2012, pp. 68-69）。

1939年8月、日満華交歓競技会に参加する選手団に対し、中華民国臨時政府<sup>23)</sup>教育部総長の湯爾和が訓話を述べた。湯爾和は、体育の普及がなされず「東亜病夫」となっている中国の現状を嘆き、日華親善、東亜新秩序に向かって共に邁進すべきことを説きつつ、参加する目的は勝つことではなく日本の体育の発展、技術や訓練、更に日本人の道徳や規

20) だが学士俱楽部との試合に関しては、その成績は「学俱 39——中華 38」となっている。

21) どの組織の委員長か明記していないが、同記事にある「大会籌備会」のことと思われる。

22) 高嶋（2012）は、満洲国選手団は日本人が大半を占めつつ「五族協和」の体裁を整えるために他民族選手を含めていたのに対し、中華選手団を中国人のみで構成した背景には監督を務めた岡部平太の意向があったと論じる。岡部は中国と日本は対等の関係を築くべきだと考え、日本人優位の満洲国のあり方に疑問を抱いていたという（高嶋、2012, pp. 57-58）。

23) 1937年12月に成立し、日本占領下華北を統治したいわゆる傀儡政権。注7も参照。

律についても学んでくることだと説いた（「参加中日満運会選手 昨隆重行授旗礼」『新民報』（北京）1939, 8, 20, p. 3）。日中双方の選手が共に参加するスポーツイベントが「日華親善」を説く場として、更には日本人が中国人の従うべき指導民族であることを確認する場としての機能を持たされていた様子が窺える。同大会を前に、『新民報』社説も中国の体育は劣ると欠点を列挙して「日本に学べ」と説いている。だが同大会の選手団については技術、品学ともに理想的であると一応評価しており、中国の体育界は近年着実に進歩しているとも述べ、今回「東亜病夫」の汚名を雪ぐようにと鼓舞している（「社論 送中国参加親善交驩運動大会選手派遣団赴満」『新民報』（北京）1939, 8, 22, p. 3）。

同大会の試合結果と成績は『新民報』にまとめられている。まず9月1日から3日までは新京で試合が行われた。陸上の個人競技14種目中、13種目で日本選手が1位、1種目だけ満洲選手が1位となった。中華選手が1位になった種目はひとつもない。種目ごとに、1位から5位または6位までにランクインした選手の成績が記載されている。その範囲内で中華選手が日本選手を上回る成績を残したケースを探すと、2種目で1位日本、2位中華、3位日本、1種目で4位中華、5位日本とある3件だけ確認できる。更に中華選手は2種目で中華新記録、3種目で華北新記録を出したが、いずれもそれより上位に日本選手がランクインしている。新記録を打ち立てたとは言え、かえって中国が日本の実力に及ばないを見せつけられた大会であったとも言える。団体競技を見ても、リレーは1位日本、2位満洲、3位中華とやはり振るわず、サッカーでも中華は満洲に勝ったが、日本には敗れた（「中日満運会成績 新民会体育会昨公布」『新民報』（北京）1939, 9, 22, p. 3）。

続いて同じ選手団が奉天に移動して、9月5日から6日にかけて実施された試合についても同様の構図が見て取れる。陸上の個人競技12種目全てで日本選手が1位であった。同じく上位1位から5位または6位までの順位が掲載されている中で、中華選手が日本選手の記録を上回ったケースは3種目のみである。このうち2種目で華北新記録を打ち立てたが、日本選手がいずれも1位であるため、当然ながら日本選手が中華選手を上回る記録を既に出している。リレーとバスケットボールでも中華は日本に敗れた（「中日満運動会奉天大会之成績」『新民報』（北京）1939, 9, 23, p. 3）。

この後、中華選手団は京城へ移動し、9月8日から9日にかけて朝鮮との対抗試合を行った。こちらを見ると中華選手の成績は劣っておらず、個人競技12種目のうち、6種目で中華選手が1位になり、3種目で華北新記録、1種目で中華新記録を打ち立てた。こちらは打って変わって中国人選手の勝利や活躍が見られた大会だった（「中日満運動会朝鮮比賽結果 新民会昨日公布」『新民報』（北京）1939, 9, 24, p. 3）。高嶋（2010, 3）はこの試合について、日韓併合後の朝鮮の発展を中国人に見せることを意図したものと説明している（高嶋、2010, 3, p. 58）。そうであるならば、同大会は朝鮮が相手なら中国は勝てるなどを示した大会であり、結果として意図に反する大会となつたとも言えよう。

こうした結果を受けて、同大会を終えて帰還した中華選手団を北京市長の余晋龢が宴會に招き、中華新記録を打ち立てた李世明、張立三の2選手に賞品を渡した。余晋龢は特にこの2選手を中心に、他の華北新記録を打ち立てた選手も含めてその活躍を称えるのだが、

あとは「友邦」日本と共同で防共の旗を掲げ、大東亜建設の責任を果たすべく、競技大会の結果は国民の体位向上を奨励し、東亜新秩序建設の基礎となろうと述べる。親日的、政治的なコメントに帰結するのだが、中国人選手のレベルの向上を確認しようとした場面であったと見ることはできよう。ここで中華選手団の団長を務めた宋介は、中国選手の活躍を称えつつも全国記録を打ち立てたのが2選手だけだったため、まだまだ及ばないと謙遜する。同時に、満洲、朝鮮で見た体育設備を評価し、中国も設備を改善すれば今後勝利できるかも知れないと期待を膨らませる。この次に華北新民体育協会顧問で中華選手団監督の岡部平太（高嶋、2010, 3, pp. 67-69, 2012, p. 58）が発言し、日本の体育は非常に進歩しているが中国は遅れている、施設も外見は立派だが中身は欠陥が多いなどと苦言を呈し、余晋龢に対して改善を求めた。中華選手団の勝利と活躍を称える場であったはずだが、結局優越する日本、遅れた中国という構図に収まっている（「中日満選手戴誉帰来栄庸上奨 昨日一幕盛宴」『新民報』（北京）1939, 10, 1, p. 3）。

それでも、同大会での中国人選手の活躍を称えるムードは続いたようで、中華新記録や華北新記録を打ち立てた選手に、後日新民会も賞品を贈呈している（「華北参加中日満運会 破全国紀錄者新民会今日頒獎」『新民報』（北京）1939, 10, 13, p. 3）。前述の通り、中国人選手が同大会で新記録を打ち立てたとは言え日本人選手の成績の方が上回るため、かえって日本人の優位を印象づける結果になったものと思われるが、こうした中国人選手賞賛の動きには、中国人選手の決して劣っていない姿を強調したい中国側行政機関や新民会の姿勢、また報道姿勢が窺えよう。この点には注目しておきたい。

### 3) 東亜競技大会（第1回 1940年6月、第2回 1942年8月）

東亜競技大会は、日本の皇紀2600年を記念して東京で実施されたもので、中華、満洲のほか、フィリピン、ハワイ、在日外国人などの選手団も参加した。元々同年に東京で開催する予定であったオリンピックを返上せざるを得なかつた代わりに実施されたものと言われる。これが第1回東亜競技大会であり、1942年に満洲国建国10周年を記念して新京で実施されたものが、第2回東亜競技大会と呼ばれる。同大会への中華選手団の参加は、既に南京に成立していた汪兆銘政権側が中央政府として主導権を握って進めることとなり<sup>24)</sup>、役員は同政権の中国人の要人が占めていた（高嶋、2012, pp. 69-70）。

第1回大会に向けて準備が着々と進む中、『新民報』は北京市の選手が出した前年の競技ごとの最高記録一覧を掲載している（「預選訓練班明舉行發会式 田賽將以昨年紀錄為標準」『新民報』（北京）1940, 3, 11, p. 2）。競技記録の向上を期待する報道姿勢と見て良かろう。そして中華選手の強さを誇るかのように、陸上競技の著名な選手である劉長春が指導を担当し、5000メートル走で全国記録を打破した選手である王正林がキャプテンとして参加することになり、早くも実力を伸ばすべく準備していると報じている（「華方

24) 注7参照。華北の政権も既に形式上は汪兆銘政権の一部となっていた。但し同大会の選手の大半は北京、天津から選出されていた（高嶋、2012, p. 70）。

参加東亜運会実力愈見充実 名将王正林毅然参加」『新民報』(北京) 1940, 3, 16, p. 2)。

結果は、テニスでフィリピンが優勝した以外、全ての試合が日本の圧倒的勝利に終わった（日本体育学会体育史専門分科会、1967, p. 277 など）<sup>25)</sup>。そもそも、中華選手団が代表するところの中華民国の主席である汪兆銘の開会式での祝辞は、団長の褚民誼が代読したが「準備不完全も承知の上で中国が記録的には進展して居ないため參觀研究を目的と」するなどと、他国とのまともな勝負を初めから放棄するような宣言に等しいものであった（「参加各国祝辞」『体育日本』18-7, 1940, 7, p. 4。原文は「東亜競技大会昨下午在東京隆重揭幕 褚民誼氏代汪首席致詞」『新民報』(北京) 1940, 6, 6, p. 1)。

だが、褚民誼自身は閉会に当たり、戦乱の影響で準備不足を余儀なくされた中で、中国人選手は予想以上に努力し、中国体育界の復興に向けて刺激を与えてくれたと高く評価した（「大会閉幕時 褚民誼発表談話」『新民報』(北京) 1940, 6, 10, p. 1)。『新民報』も中華選手が中華新記録を打ち立てたことやバスケットボールで中華が満洲に勝利したことを見じており、同大会で得た成果の方にできるだけ着目して肯定的に評価しようとする姿勢が窺え、勝利できなかったことへの劣等感や日本贊美を前面に打ち出す様子は見られない（「東運会昨円満閉幕 我選手造成中華跳躍新記録」『新民報』(北京) 1940, 6, 10, p. 1)。

次に、第2回東亜競技大会について見てみる。同大会の予選にあたる華北体育協会主催の北京市体育大会は、中国人選手のみが出場したものだが、『新民報』は陸上の成績が素晴らしい、3種目で中華新記録を打ち立てたと報じている（「京体育大会昨繼举行 田径競賽成績驚人」『新民報』(北京) 1942, 5, 10, p. 4)。また全国レベルの予選でも「成績は極めて高く、華北代表が特に優勢を占めた」とのこと、中華新記録も打ち立てた（「田径決戦全部記録 業経大会正式審訂公布」『新民報』(北京) 1942, 7, 21, p. 3)。

予選の段階での中華選手の活躍が大会への意気込みを高めたのか、『新民報』紙上で陸上競技選手の張立三は、大会会場に来た感想を次のように述べた。日本は東京オリンピックの実現が叶わず、世界最大の目標を失った選手は刺激もなくなり、日本代表も満洲代表も1940年以前と比べて成績が下がっているのだという。そう述べた上で「中国選手の記録は上述の状況と異なり、以前は日本や満洲に及ばなかったが、興亜紀念より毎年進歩しており、天賦の体格に加えて努力して練習を重ねていけば、近い将来、日本や満洲に勝つこともできるだろう。現在、円盤投げと砲丸投げは十分に日本と満洲に勝っている。状況次第では優勝を目指す希望もあるだろう」とまで言う。この発言は、ここまで見てきた言説に比べて強い自信を覗かせ、例外的に日本への対抗意識とも受け取れる発言である。とは言え次に掲載されている李洲の言葉はそれを打ち消すかのようであり、同大会に臨む選手団のムードも一様ではなかったようである。李洲は、満洲国建国10周年を祝うことさえできれば良く、成績や勝敗にこだわる気はないという。そして、中華は優秀な選手が諸事情により今大会に参加できなかったと述べた上で、日本と満州の選手は実力があり、中

25) 各競技の試合結果の詳細は『新民報』では報じていない。財団法人大日本体育会編（1946、復刻版1995、pp. 173-189）を参照。

華が勝利する希望はほとんどないという。そこで、「ただ道徳精神の面で勝利したい。失敗しても落ち込むことなく、あらん限りの力で自己ベスト記録を出すようにし、精神の勝利を獲得したい」と、こちらは逆に初めから競技での勝利を諦めているかのようである（「参加東運代表発表來満感想（続）」『新民報』（北京）1942, 8, 11, p. 2）。

結局は概ね日本の優位を示す大会となったと言えよう。だが、同大会で実施した13種目中、馬術とバレーボールは満洲が優勝、そして卓球は中華が優勝したのである（高嶋、2012, p. 104）。『新民報』は同大会の結果について報じていない。日本の報道を見てみると、中国に対しては「現在の情勢からしては眞の優秀選手を得がたき事情より察して当然のことと思われる」としながらも、侮りがたい実力であったと評している。中国人選手の実力の向上が見られた大会であったと言えよう（植村睦朗「東亜競技大会の成果」『アサヒ・スポーツ』20-17, 1942, 9, 1, pp. 4-5）。

#### 4) 中日交歓陸上競技大会（1942年8月）

同大会は北京体育協会と北京日本体育協会が共催した（「中日交歓体育大会 八月中旬在京挙行」『新民報』（北京）1942, 7, 21, p. 4）。試合結果は全体的に日本人が中国人を上回った。個人競技13種目の1位から3位或いは4位までにランクインした選手名が記載されているが、そのうち2種目だけ中国選手が1位、あとは全て日本選手が1位をとり、そのうち2種目で1位日本、2位中国、3位日本となっている以外は、全て日本選手が中国選手より上位にランクインしている。リレーも日本チームが1位、華北チームが2位であった（「中日交歓陸上競技 先農壇昨盛況空前」『新民報』（北京）1942, 8, 17, p. 3）。

総じて日本の優位を見せつける大会であったと言えよう。『新民報』の社説も、日本が体育を重視して武士道精神を涵養してきたのに対し、中国の民衆は衰弱して長らく「東亜病夫」と呼ばれ続けて目下危機にあると述べ、「日本健児の後に従って不朽の大業を成し遂げよう」と呼びかけるなど、結局これまでのスポーツイベントで少しづつ積み重ねてきた成果に対する自信も見られず、単なる「日本に学べ」という言説に逆戻りしている（「社論 所望於中日交歓陸上競技大会」『新民報』（北京）1942, 8, 18, p. 1）。

第2回東亜競技大会とこの中日交歓陸上競技大会の両方を振り返る座談会を、北京体育協会と北京日本体育協会が共催した。ここで日本選手代表の岩永美澄（「巖永美澄」という表記も混在）は、中国選手や中国の体育のあり方を次々と批判した。日本選手が試合前に真剣に練習していたのに対し、中華選手はほとんど練習していなかつたと指摘し、日本のスポーツはかつて歐米の悪習に染まって享楽主義や娯楽と化したもの今ではそれを完全に克服しているが、中国のスポーツは今でも享楽主義のままであることが中国の失敗の原因だという。更に中華選手は体格が良いが厳しい練習をしておらず指導者も不足しているという。これを受け、複数の中華選手たちの発言は、日本の体育・スポーツの先進性を認め、日本人に中国の体育・スポーツを指導してほしいと、次々にへり下った態度を見せるのである（「中日選手発揮偉見（一）両体協会主辦座談会之紀詳」『新民報』（北京）1942, 8, 25, p. 3）。

## 5) 華北体育大会（第1回 1939年，第2回 1940年10月，第3回 1941年10月，第4回 1942年5月）<sup>26)</sup>

同大会は、中国人選手のみが参加する都市対抗戦であるが、華北全域を挙げてのスポーツイベントであり、その影響力も大きかったと思われるため、ここで取り上げたい。高嶋（2010, 1, 2012）はここに華北体育協会における日本人と中国人の確執を見出す。高嶋は、後述する第1回華北都市交歓体育大会に日本人選手が参加することになったことを受け、第3回華北体育大会にも日本人選手を参加させるよう日本人理事が要求するも、「日華親善」の役割は華北都市交歓体育大会で十分果たせており、華北体育大会は純粋に中国の体育発展を追求するために中国人選手のみで行うということを「表向きの理由」として中国人理事に拒否されたと叙述している（高嶋, 2010, 1, p. 120, 2012, p. 99）。

『華北体育』では、1939年の秋に北京で実施された「華北四省市体育大会」が第1回の華北体育大会だと説明されている（安夢洪「第三回華北選手権体育大会前後話」『華北体育』1-6, 1941, 10, p. 2）。1940年10月に北京で開かれた第2回大会は華北新民体育協会が主催し、大会会長を新民会副会長となっていた繆斌が務めた。繆斌は開会の辞で、国家を強くするには国民が強い身体を持つことが必要で、新中国建設と東亜新秩序建設のために体育を重視すべきだと説きつつ、選手が努力して良い成績を残すことを期待すると激励した（「二届華北運動会 首日成績良好」『新民報』（北京）1940, 10, 6, p. 2）。『新民報』は競技成績の一覧表も掲載しているが、実際に華北新記録も打ち立て、全国記録にも近づくなど、競技の成績は良好だったと報じる（「二届華北運動会 昨日円満閉幕」『新民報』（北京）1940, 10, 6, p. 2）。

1941年10月に天津で行われた第3回大会にあたって『新民報』が発表した社説は、やはり日本が世界一の強国であるのに対して中国は「東亜病夫」であったが、今では中国は独立と更生を目指し、そして東亜新秩序建設の責任を日本と共に分担すべき立場にあり、華北体育大会はもし競技で優れた成績を残したならば更に中国の体育を発展させて民族の尚武精神を高めることができると、同大会の意義を述べる（「社論 翌華北体育大会」『新民報』（北京）1941, 9, 19, p. 1）。また華北体育協会会長の張心沛が開会の辞を述べ、「東亜病夫」と呼ばれてきた劣等感も滲ませるが、今や中国の復興、新国家建設の使命を帶びて克服に向け努力していると意気込みを示した（「華北体育大会昨熱烈競賽 京陸沈二女子標槍均打破華北新紀錄」『新民報』（北京）1941, 10, 11, p. 3）。第3回大会でも華北新記録、または前回大会の記録を破る結果を残した。全体としては中国人のレベルが向上していく様子が見て取れる大会だったと言えよう。北京市、天津市、青島市、河北省、山東省、山西省、河南省の代表選手が参加していたが、北京市が総合優勝し、5種目で華北新記録を打ち立てた（「華北体育大会昨熱烈競賽 京陸沈二女子標槍均打破華北新紀錄」『新民報』（北京）1941, 10, 11, p. 3, 「華北体育大会第二日 五千米青劉琨造新記録」『新民

26) 笹島（1966）は第1回大会を1940年、第2回大会を1941年、第3回大会を1942年としているが、以下に見るように同時代資料の記述と食い違っている（笹島, 1966, p. 88）。

報』(北京) 1941, 10, 12, p. 3, 「華北体育大会昨円満閉幕 北京市栄獲総冠軍」『新民報』(北京) 1941, 10, 13, p. 3)。

第4回大会も北京で開催され、華北新記録、全国新記録を打ち立てた。なお、第4回大会は第2回東亜競技大会の華北予選会を兼ねたものだったようである(「第四届華北運動大会 昨在先農壇盛大挙行」『新民報』(北京) 1942, 5, 31, p. 3)。

以上の社説や大会での要人のスピーチなどを見ると、国家を強くするために体育を発展させ、「東亜病夫」の屈辱を克服しようとする意気込みが窺える。その先にあるのは東亜新秩序建設を担うという、日本の占領統治を支える枠組みから外れるものではない。だが同時に、中国が体育を通して強くなることは、「進んだ日本」と「劣れる中国」という関係を中国人に確認させ、日本の占領統治を受け入れさせるという支配の構図をやがては壊すことになり得る。そして同大会は中国人選手が次々と新記録を打ち立てているように、中国の体育の発展を可視化している。同大会は中国人に劣等感を抱かせるのではなく、むしろ中国の発展を鼓舞する作用を及ぼしたものと考えられよう。

なお、第3回大会については運営に携わった機関についても確認できる。主管は華北体育協会、主催は華北天津市体育協会、後援は天津特別市公署、新民会天津市特別総会、そして「各新聞社」であったが(「華北体育大会 日程及参加須知擬定公布」『新民報』(北京) 1941, 9, 13, p. 3)、顧問には天津居留民団団長臼井忠三、新民会副会長安藤紀三郎、委員には華北体育協会参議の岡部平太、華北体育協会主事の安田光昭ほか多数の日本人が含まれていた(「華北体育大会 大会職員全部決定」『新民報』(北京) 1941, 10, 1, p. 3)。上述の通り、高嶋(2010, 1, 2012)は同大会について、純粹に中国の体育発展を追求することを目的として中国人選手のみで行われたものと説明しているが、運営側に日本人が関わることは排除されていなかったようである。このような目的を掲げ、しかも実際に中国の体育の発展が可視化できる成果をあげた大会の運営に日本人が関わっていたことにも注目しておきたい。

#### 6) 華北都市交歓体育大会(第1回 1941年7月、第2回 1942年9月、第3回 1943年9月、第4回 1944年6月)

同大会も、国際試合ではなく華北地域内の都市対抗戦である。日本の先行研究では笛島(1966)と高嶋(2010, 1, 2012)がこの大会の存在に触れているが、内容に関する考察はない(笛島, 1966, p. 88, 高嶋, 2012, pp. 99, 212, 238, 2010, 1, p. 120)。中国の先行研究が概説するところによると、各都市から日中両国の選手が混合チームで出場し、試合前に日本軍の「英靈」に黙祷をし、反共スローガンを掲げ、審判にも日本人と中国人の双方を起用するなどして「日華親善」を演出したスポーツイベントであったという(体育院系教材編審委員会『中国近代体育史』編写組, 1985, p. 150)。

同大会は1941年以降、毎年開催地を変え、都市ごとに設けられた華北体育協会支部が持ち回りで運営した。『新民報』より確認すると、第1回大会は1941年7月に青島で、第2回大会は1942年9月に太原で、第3回大会は1943年9月に濟南で、第4回大会は

1944年6月に天津で実施されている。第5回大会は1945年に保定で実施する方向で調整されていたようだが（「華北都運会改称都市聯歡体育大会 下届大会将在保定举行」『華北新報』1944, 7, 8, p. 4），実際に開催されたか否かは記録に残っていない<sup>27)</sup>。

なお、代表選手団を派遣した参加都市は、第1回大会は北京、天津、濟南、保定、開封、徐州、青島（「華北都市交歡体育大会 内部組織大致規定」『新民報』（北京）1941, 5, 25, p. 2），第2回大会ではそのうち徐州が抜ける（「華北都市交歡体育大会 實施要項確定公布」『新民報』（北京）1942, 8, 22, p. 3）。第3回大会については「第三屆華北十都市中日青年体育交驩大会」との表記も見られ、参加都市は北京、天津、青島、太原、開封、保定、濟南、煙台、唐山、石門に増えている（「第三屆都市体育交驩大会 延期二十五日正式揭幕」『新民報』（北京）1943, 9, 23, p. 2）。第4回大会についても「第四屆華北十都市中日青年体育交驩大会」という表記が見られるのだが（「第四屆華北都運会 定期在津市举行」『華北新報』1944, 5, 9, p. 4），代表選手団を派遣したのは北京、天津、青島、濟南、太原、保定、開封の7市としか報じられておらず（「華北都市交驩体育会 各地代表相繼選出」『華北新報』1944, 5, 19, p. 4），参加選手リストもこの7市の分しか確認できない（「第四屆華北都市交驩体育大会」『華北新報』1944, 6, 9, p. 2）。

同大会の正式名称は華北各都市中日青年体育交歡大会のようである（「準備參加華北体育大会 本市預選開始報名」『新民報』（北京）1941, 6, 8, p. 2）。各都市から中国人と日本人が混合で代表選手団を構成して出場した。

大会の運営にも日中双方の機関が関わり、顧問や委員として中国人と共に日本人も加わった。第1回大会は華北青島体育協会主催だが、後援に青島市公署や新民会のほか、興亜院、日本総領事館、日本居留民団、日本体育協会新聞社といった日本側の機関が名を連ねる（「華北都市交歡体育大会 内部組織大致規定」『新民報』（北京）1941, 5, 25, p. 2）。これら機関の日中双方の複数の要人が顧問として参画し、華北政務委員会委員長王揖唐と

27) 先行研究には、華北都市交歡体育大会が実施されたのは1939年から1943年までとするもの（体育院系教材編審委員会『中国近代体育史』編写組編著、1985, p. 150, 谷世権、1989, p. 236）、1939年から1944年までとするもの（羅時銘・趙謙華主編、2008, pp. 305-306）があるが、これらは華北都市交歡体育大会と華北体育大会を混同していると思われる。この混同は同時代資料にも見られる。1943年の『新民報』が、華北都市交歡体育大会は一昨年と昨年に北京、天津、青島、太原とそれぞれ続けて実施し、「第五届大会」を濟南で実施することを決定したと報じている。（「五屆華北都市体育大会 決定在濟南市举行」『新民報』（北京）1943, 2, 25, p. 3）。だが、実際に1943年に濟南で実施された華北都市交歡体育大会は第3回である。北京と天津とではこの時点では実施したことがない。一方、華北体育大会の開催地は前述の通りで、青島と太原では実施していない。華北体育大会をこれまで通り年1回実施したものとして数えていくと、1943年には第5回となる。以上のように、この『新民報』の記事は両大会の情報が混在している点で不可解であるが、いずれにせよこれ以降『新民報』、『華北新報』紙上に華北体育大会に関する報道は確認できない。この記事の「五屆」が単なる誤植でないならば、以上のことから考えて、1943年以降、華北体育大会は華北都市交歡体育大会に吸收合併されたのではないかとの推測もできる。

興亜院華北連絡部長塩沢清宣が並んで大会名誉会長となった（「華北都市体育大会全部職員昨經聘定」『新民報』（北京）1941, 6, 25, p. 2）。第2回大会の主管は華北体育協会、主催は華北山西省体育協会、後援には山西省公署、新民会山西省總会、太原市公署、新民会太原市總会、太原鉄路局、太原市体育協会、山西新民報とある他に、山西省陸軍特務機関、太原日本總領事館、太原日本居留民団、山西産業株式会社、太原大日本体育会、東亞新報太原支社といった日本側の機関も加わった（「華北都市交歓体育大会 実施要項確定公布」『新民報』（北京）1942, 8, 22, p. 3）。第3回大会では名誉会長に華北政務委員会委員長の王克敏と教育総署督辦の蘇体仁、名誉副会長に塩沢清宣と新民会副会長の喻熙傑が並ぶ。（「都運会職員会程公布 京市代表団明日啓程赴済」『新民報』（北京）1943, 9, 20, p. 2）。第4回大会の主催は華北体育協会北京特別市分会、後援には北京特別市政府、新民会北京特別市總会に加え、興亜翼賛会北京支部、日本居留民団といった日本側の機関がやはり入っている（「参加華北都運大会 京預選辦法決定」『華北新報』1944, 5, 2, p. 4）。名誉会長には前回に続き王克敏、そして褚民誼、塩沢清宣の合計3人が並び、顧問や委員にはこれまでと同様に日本人も加わっていた（「第四屆華北都運会 大会職員名单公布」『華北新報』1944, 5, 30, p. 4）。

そして開会式では、第1回大会から国旗への敬礼が盛り込まれている（「参加華北体育大会 全部行程昨已公布」『新民報』（北京）1941, 6, 21, p. 2）<sup>28)</sup>。第2回大会以降も、毎回の開会式で日中両国の国旗を揚げ、両国の国歌を齊唱していた（「都市体育交驥 昨在太原盛大揭幕」『新民報』（北京）1942, 9, 26, p. 3, 「都運今日在濟揭幕 蘇体仁代表王名譽会長出席」『新民報』（北京）1943, 9, 24, p. 3, 「華北都市体育交驥比賽程序編排藏事 全部代表名单公布」『華北新報』1944, 5, 27, p. 4）。また、第2回大会の開会式では、日本人の中学校、国民学校の児童生徒がマスゲームを披露したり（「都市体育交驥 昨在太原盛大揭幕」『新民報』（北京）1942, 9, 26, p. 3），第4回大会では日中双方の小学生による合同体操も行われたりした（「中日学生合同操表演 宛如美妙圖案」『華北新報』1944, 6, 10, p. 4）。都市対抗戦でありながら、日本の存在感を際立たせ、国際試合さながらに「日華親善」の演出を重視していた様子が窺える。

だが、参加選手の人数は、都市ごとに見ると例外はあるとは言え、全体的には中国選手より日本選手が少なかった。第1回大会の計画段階では、参加者について「各都市より40名から60名。特別に日本選手の参加を認める」とあるように、日本選手の参加は例外的な扱いにしようとしていたようにも見える（「華北都市交歓体育大会 内部組織大致規定」『新民報』（北京）1941, 5, 25, p. 2）。最終的に参加した選手は、合計日本人約80人、中国人約230人だったという（岡部平太「華北都市体育大会を觀る 日本体育提携の具現」『読売新聞』、1941, 7, 13, p. 2）<sup>29)</sup>。

28) 『新民報』はどこの国旗かを記載していないが、『朝日新聞』は「日華両国旗」と明記している（「興亜の体育祭典 盛夏の青島で盛大」『朝日新聞』北支版、1941, 7, 8, p. 7）。

29) 『新民報』には第1回大会の北京予選に参加した選手のリストが「中国方面」と「日本方面」

第2回大会については、北京市代表に決定した選手の人数に限って名簿から分かるが、中国人か日本人かを区別できる記載の仕方ではないため、名前から判断するしかない。日本選手9人、中国選手57人である（「参加都運代表選出 中日健児将準備一露頭角」『新民報』（北京）1942, 9, 11, p. 4）。第3回大会については、『新民報』は都市ごとに「中国選手」と「日本選手」に分けて人数を記載している。これを合計すると日本選手147人と中国選手393人である（「第三回都市体育交驩大会 延期二十五日正式揭幕」『新民報』（北京）1943, 9, 23, p. 2）<sup>30)</sup>。第4回大会については、都市ごとの選手氏名が記載されている。陸上競技は日本選手19人、中国選手65人、球技は3種目合計すると日本選手43人、中国選手203人である（「第四回華北都市交驩体育大会」『華北新報』1944, 6, 9, p. 2）。両者の人数が不均衡な大会だったが、日中両国の国旗と国歌を持ち出す演出をしたことは、それだけ日本の存在を大きく見せようとし、日本との交歓を目的とする大会であることを強くアピールしようとした姿勢の表れであろう。

参加資格を見てみると、第1回大会の北京市代表の予選は「北京市に居住する中日一般市民は皆申し込み参加ができる」（「準備参加華北体育大会 本市預選開始報名」『新民報』（北京）1941, 6, 8, p. 2）と規定している。第4回大会の北京予選会も同様に「本市に居住する中日市民」である（「参加華北都運大会 京預選辦法決定」『華北新報』1944, 5, 2, p. 4）。前節で見たような一般市民への体育普及を意識したものでもあろうが、以下に見るように予選や大会で次々と新記録を打ち立てたことから考えると、同大会に参加したのは結局のところまさに「中日両国の精銳健児」（「田径代表預選大会今午在体育场举行 中日精銳健児均行参加」『新民報』（北京）1941, 6, 15, p. 2）であり、一般市民への体育普及を図るというよりは、優れた運動選手を活躍させる側面の方が強かったと見て良かろう。

ではここから、試合結果について考察を進めていく。繰り返すが同大会は中国対日本の国際試合ではなく、あくまでも都市対抗戦である。そのため、これまで見てきた国際試合と単純な比較はできないが、中国選手が日本選手の記録を上回るケースが少なからず見られた点で、これまでとは異なる展開を見せた大会だったのである。球技については日中混合チームによる団体戦であり、都市ごとの勝敗しか記載されず、中国と日本の勝敗や優劣については比較できない。だが陸上競技のうち、個人競技に限っては個人の順位と成績が記載されるため、中国選手と日本選手の成績の優劣を確認できる。そこで、以下では考察

---

に分けて掲載されているが、「日本方面」のリストに張立三が含まれている（「田径代表預選大会今午在体育场举行」『新民報』（北京）1941, 6, 15, p. 2）。張立三は中華代表の選手として日満華交歓競技会や第2回東亜競技大会に出場した選手であることは本稿で既述の通りだが、台湾出身者である。高嶋（2012）は、台湾選手が第2回東亜競技大会に日本、満洲国、中華と、代表する国を異にして参加していたこと、中華選手としての参加には「中国系」として台湾出身者が認められていたことを叙述し、張立三をその一人として挙げているが、華北都市交歓体育大会では日本人側に回っている。スポーツイベントにおける台湾人の扱いは一定ではなかったようである（高嶋、2012, p. 105）。

30) 高嶋（2012）は日本選手を138人としており、これとは食い違う（高嶋、2012, p. 238）。

対象を陸上の個人競技に限定する。

第1回大会に向けて北京で実施された予選では、陸上の個人競技の12種目中、10種目は中国選手が1位となった。各種目1位から3位までにランクインした選手の氏名が記載されているのだが、その10種目中、6種目は1位から3位まで全て中国選手である。そもそも日本選手の人数が少ないことも考慮する必要があり、日本選手が参加していなかつた種目なのか、日本選手が4位以下だったのかは分からぬ。だがあと4種目は2位以下に日本選手の名前が見え、中国選手が日本選手を上回る結果を出した競技であったことが確認できる（「京田径代表預選会 昨日円満蔵事」『新民報』（北京）1941, 6, 17, p. 2）。

大会本番にあたって『新民報』が発表した社説は、中国の体育は日本の協力により進歩したのであり、日本の体育が発展している一方で中国は劣るという趣旨ではあるが、それだけではなく、「華北人の身体は元々丈夫で、訓練をすれば興亜の前衛及び長城となれる」という自信も見せる（「社論 全華北体運大会揭幕」『新民報』（北京）1941, 7, 5, p. 1）。

大会本番の試合結果については、『新民報』より『華北体育』の方が詳細に報じているのでそちらを見ると、各種目に出場した選手の順位が1位から4位まで記載されている。陸上の個人競技13種目中、10種目で中国選手が1位となった。そのうち8種目は、2位以下に日本選手の名前が見える。あとの2種目は中国選手の名前しか見られない。予選の結果と同じ見方をすると、少なくとも8種目で中国選手が日本選手より上回る成績を残したことは確かである（「全部田径賽成績」『華北体育』1-4, 1941, 7, p. 2）。

続けて第2回大会について見てみよう。北京で行われた予選に関する『新民報』の報道は、見出しから「陸上競技の成績が目覚ましい」と高く評価しているが、ここでも同じく陸上の個人競技14種目中、12種目で中国選手が1位となった。各種目の1位から3位までの選手名が記載されているが、中国選手が1位になった12種目のうち、日本選手が2位以下にランクインしているのは5種目ある（「都市体育交驥京預選会 田径賽成績驚人」『新民報』（北京）1942, 9, 7, p. 4）。

本番の試合でも、種目ごとに1位から多いものでは6位までにランクインした選手の都市、氏名及び成績まで記載されている。ここでも日本人か中国人かの区別は氏名から判断するしかないが、13種目中、中国選手が1位になったのは10種目、そのうち9種目では2位以下に日本選手の名前が見える。また、2種目で中国選手が華北新記録を打ち立てた（「都市体育交驥 昨在太原盛大揭幕」『新民報』（北京）1942, 9, 26, p. 3、「華北都市体育交驥 足球預賽北京勝太原」『新民報』（北京）1942, 9, 27, p. 3、「晋都市体育交歛 三日来競技極呈活躍」『新民報』（北京）1942, 9, 28, p. 3）。

第3回大会については、試合結果に関する報道は少ないが、陸上の個人競技5種目中、4種目で中国選手が1位となった。いずれも2位以下に日本選手の名前が見える（「都運昨円満閉幕 田径總分北京獲冠軍」『新民報』（北京）1943, 9, 27, p. 2）。

第4回大会は、陸上の個人競技4種目の試合結果リストを見ると、いずれも中国選手が1位であった。そして2位以下に日本選手の名前が見える（「田径賽昨日結果」『華北新報』1944, 6, 12, p. 1）。他にあと2種目も中国選手が1位、日本選手が2位であったことも

記述されている（「一千五百公尺決賽一個緊張鏡頭」『華北新報』1944, 6, 11, p. 4）。

また第4回大会開催を前に、『華北新報』はこれまでの華北都市交歓体育大会の記録保持者リストを掲載している。これを見ると、個人の最高記録が記載されている14種目中、12種目の記録保持者は中国選手である（吳逸民「華北都市交歓体育大会史略 挙辦迄今已歷三載溝通中日青年情感」『華北新報』1944, 6, 9, p. 2）。

第4回大会終了後の『華北新報』の社説を見ると、体格は中国人より日本人の方が良く、それは日本人は衛生が良好で運動する習慣があるからだと、相変わらず「日本に学べ」と説いている（「社論 都運大会閉幕獻言」『華北新報』1944, 6, 11, p. 1）。だが華北都市交歓体育大会の試合の展開をひと通り見ていくと、中国人に対して日本選手が目覚ましい活躍を見せて畏敬の念を抱かせるような大会であったとは思えない。出場した中国選手と日本選手の人数に差があるとは言え、日中両国の交歓を趣旨に掲げた試合で、中国選手が日本選手に劣らない姿を示し、更には日本人を凌駕さえする場面が中国人の眼前で次々と展開されたのである。この点はこれまでに見てきた国際試合とは大きく異なる。

そして既に見たように、この大会の運営には日本側の機関及び日本人が多く関わっていた。中国人の体育のレベル向上と、日本選手を凌ぐ中国選手の姿を見せる空間を、占領統治政策の担い手でもある日本人の手で作り出したとも言える。日本の優位を中国人に確認させることができが占領統治を補強する要素でもあったと考えられることは既述の通りだが、これでは日本人の手で占領統治を支える要素をひとつ減らしたとも言えよう。

中国人側がこの華北都市交歓体育大会に臨むにあたって発した言説をもう少し見てみると、第3回大会が行われた1943年9月は、既に汪兆銘政権が太平洋戦争参戦を表明しており、前節で見た通り体育・スポーツを論じる中でも戦時意識の高揚などといった言葉が見られるようになった時期である。同大会開催にあたって『新民報』が掲載した社説では、中国は総動員体制を敷いている最中であり、そのために身体の鍛錬が必要だと述べる。これまで「東亜病夫」と呼ばれてきたが、これからは国家を強くし日本と協力して英米を撃滅するのだという（「社論 第三届華北都運会揭幕」『新民報』（北京）1943, 9, 25, p. 1）。第4回大会の大会会長であった天津市長の張仁蠡は開会式の式辞で、「大東亜戦争」勝利を見据えて「中日両大民族の心からの団結をし、一層鍛錬」するものと同大会の意義を説明している（「促進民族身心剛健作決戦必勝後盾 張仁蠡会長致開会詞」『華北新報』1944, 6, 10, p. 4）。また、新民会副会長で、第4回大会の名誉副会長でもあった喻熙傑は、大会の感想として、中日青少年が共に鍛錬し中日の親睦を深め東亜建設を共同で担う精神を示し、中日同甘共苦同生共死の精神を象徴するものだったと述べている（「以本届都運優良成績普遍於華北青年 喻熙傑談参加都運感想」『華北新報』1944, 6, 13, p. 4）。

このように、日本の戦争に協力するために中国は強くならなければならないと言うのである。日本に対抗する姿勢を打ち出すようなナショナリズムは抑制されているが、中国から見て国家建設という点でも、日本から見て戦争協力という点でも、中国人が強くなること自体は肯定される。日本に劣り、日本の指導を仰いで学ばなければならない中国ではなくなり、日本と共に「大東亜」建設を担う実力を持った中国へと成長していく。同大

会は、日本の優位を示すためのスポーツイベントとは異なり、日本に劣らぬ中国の姿を可視化したスポーツイベントであったと言えよう。

## おわりに

スポーツイベントは、しばしばナショナリズムの衝突を引き起こす危険性を孕む。にもかかわらず、日本占領下華北では、体育の普及と発展を進め、中国対日本の国際試合や、中国選手と日本選手の優劣が目に見える形で表れるスポーツイベントを盛んに実施していた。日本の後塵を拝して体育の発展を図るという観点や、「日華親善」を体現し、且つ日本人の優位を示すために日本人と中国人が国際試合を行うという観点に立てば、スポーツイベント及び体育の普及や発展は、占領統治を補強する要素になるとも言えよう。だが、中国人の体育の発展はやがて日本の優位を脅かす可能性があり、スポーツイベントがそれを証明することにもなりかねない。

本稿の考察から見えてきたのは、まず、日本占領下華北が体育を重視し、単に「日華親善」などのイデオロギー宣伝の場としてだけではなく、市民への体育普及、市民の体力向上も目的に掲げながら、盛んにスポーツイベントを実施した社会であったことである。次に、日本占領下華北におけるスポーツイベントが単に日本人の優位を中国人に再確認させる場として機能していたのではなく、一直線ではないにしてもスポーツイベントを通して中国人の体育面の能力向上が見られ、中国選手の目覚ましい活躍、やがては日本選手を凌駕する姿も見られるようになったことである。また、本稿では『新民報』及び『華北新報』を中心見てきたが、中国側のメディアが体育を通して「日本に学べ」と説くだけではなく、中国人を日本人に劣る存在と自己認識させようとするのとは逆に、中国選手の活躍を積極的に報じ、体育の発展を印象づけようとしてきたことも、注目すべきであろう。

そして、この体育発展の過程には、占領統治側に立つ日本人及び日本の機関が参与していた。中国人のナショナリズムに対する日本人の警戒心は皆無ではないが、総じてスポーツイベントを控えざるを得ないほどの危機感はなかったと言えよう。だが、中国における体育の発展と、それを証明することにもなるスポーツイベントに日本人及び日本機関が関わっていたことは、日本人の優位性を中国人に示す要素を、日本人の手でひとつ減らすことになったという見方もできる。体育の発展によって戦時動員の要請に応え得る中国人を養成するという観点に立てば、それは日本にとっても望ましい側面も持つが、占領統治下における体育・スポーツは、こうしたジレンマを抱えながら展開したものだったのである。

(本稿は南開大学歴史学院博士後研究人員（2017年9月から2019年12月まで）在職中の研究成果である)

(きくち しゅんすけ・立命館大学BKC社系研究機構客員研究員)

## 【参考文献】

### 日本語

#### 〈研究書・論文〉

- 石坂友司・小澤考人編著（2015），『オリンピックが生み出す愛国心』かもがわ出版
- 小澤考人（2009），「アジアのオリンピック・東亜競技大会—紀元二千六百年の祭典—」（坂上康博・高岡裕之編著『幻の東京オリンピックとその時代』青弓社）
- 小野容照（2014），「植民地朝鮮の甲子園大会」『二十世紀研究』第15号
- 小野容照（2015），「早稲田大学野球部と朝鮮—近代日朝スポーツ交流史の断面—」（李成市・劉傑編著『留学生の早稲田』早稲田大学出版会）
- 小野容照（2017），『帝国日本と朝鮮野球』中央公論新社
- 菊地俊介（2013），「日本占領下華北における新民会の女性政策」『現代中国研究』第32号
- 菊地俊介（2015），「日本占領下華北における新民会の「青年読物」」『現代中国研究』第34号
- 金誠（2014），「植民地朝鮮における近代性と民族の「身体」」『植民地教育史研究年報』第17号
- 金誠（2017），『近代日本・朝鮮とスポーツ』塙書房
- 後藤健生（2013），『国立競技場の100年』ミネルヴァ書房
- 財団法人大日本体育会編（1946），『大日本体育協会史（補遺）』（復刻版：木下秀明監修（1995），『戦時体育基本資料集』第13巻，大空社）
- 財団法人日本体育協会編（1970），『日本スポーツ百年』財団法人日本体育協会
- 財団法人日本体育協会編（1986），『日本体育協会75年史』財団法人日本体育協会
- 笛島恒輔（1966），『近代中国体育・スポーツ史』逍遙書院
- 柴田哲雄（2009），『協力・抵抗・沈黙』成文堂
- 高嶋航（2010，1），「戦争・国家・スポーツ：岡部平太の「転向」を通して」『史林』第93巻第1号
- 高嶋航（2010，3），「戦時下の平和の祭典」『京都大学文学部研究紀要』第49号
- 高嶋航（2012），『帝国日本とスポーツ』塙書房
- 土佐昌樹（2015），「スポーツ・ナショナリズムと東アジアの発展」（土佐昌樹編『東アジアのスポーツ・ナショナリズム』ミネルヴァ書房）
- 日本体育学会体育史専門分科会編（1967），『日本スポーツ百年の歩み』ベースボール・マガジン社
- 堀井弘一郎（2017），「「親日」派華字紙『中華日報』の日本批判」（堀井弘一郎・木田隆文編『戦時上海グレーゾーン』（『アジア遊学』第205号）勉誠出版）

#### 〈同時代資料〉

- 朝日新聞社（1923，3～1943，6），『アサヒ・スポーツ』第1巻第1号～第21巻第11号
- 朝日新聞西部本社（1940，9，1～1945，3，31），『朝日新聞』北支版（復刻版：（2008～2011），ゆまに書房）
- 興亞院華北連絡部（1941），『北支に於ける文教の現状』

大日本体育会（1938, 10 ~ 1944, 12）,『体育日本』第16卷第10号～第22卷第12号  
読売新聞社（1874, 11, 2 ~ 1942, 8, 4）,『読売新聞』

## 中国語

### 〈研究書・論文〉

- 汪智・梁峻（2000）,『20世紀の中国・体育衛生卷』甘肃人民出版社  
夏書宇・巫蘭英・劉薇主編（2007）,『中国体育通史簡編』河南人民出版社  
郭貴儒・陶琴（2003）,「日偽在華北新聞統制述略」『民国檔案』2003年第4期  
顏紹瀘・周西寬（1990）,『体育運動史』人民体育出版社  
谷世權編著（1989）,『中国体育史』下册,北京体育学院出版社  
国家体委体育文史工作委员会・中国体育史学会編（1989）,『中国近代体育史』,北京体育学院出版社  
肖斌・王海燕・高潔（2016）,「抗戦時期陝甘寧辺区与日偽統治区の体育競賽比較分析研究」『体育世界』学術第762期  
体育院系教材編審委員会『中国近代体育史』編写組編著（1985）,『中国近代体育史』人民体育出版社  
譚華主編（2005）,『体育史』高等教育出版社  
陳昌鳳・劉揚（2004）「『新民報』に関する研究」『国際社会文化研究所紀要』第6号（本文は中国語）  
陳昌鳳・劉揚（2005）「『新民報』に関する研究（続き）」『国際社会文化研究所紀要』第7号（本文は中国語）  
程曼麗（2004）,「『華北新報』に関する研究」『国際社会文化研究所紀要』第6号（本文は中国語）  
程曼麗（2004）,「華北地区最後一份漢奸報紙——『華北新報』研究」『新聞与伝播研究』2004年第3期  
程曼麗・劉波（2005）,「『華北新報』に関する研究（続き）」『国際社会文化研究所紀要』第7号（本文は中国語）  
羅時銘・趙謙華主編（2008）,『中国体育通史』第4卷,人民体育出版社  
劉揚・陳靜文（2013）,「從日偽『新民報』看「亜細亜主義」的誘惑与欺騙」『新聞春秋』第28期

### 〈同時代資料〉

- 華北新報社（1944, 5, 1 ~ 1945, 9, 30）,『華北新報』  
華北政務委員会教育總署（1941, 7 ~ 1944, 4）,『教育時報』第1期～第16, 17期  
華北体育月報社（1940, 6 ~ 1943, 10）,『華北体育』第1卷第4期～第3卷第4期  
新民報社（1938, 1, 1 ~ 1944, 4, 30）,『新民報』（北京）